

平成 2 2 年度病虫害発生予報第 4 号

平成 2 2 年 6 月 3 日
鳥取県病虫害防除所

予報の概要

区 分	農 作 物 名	病 害 虫 名	発生時期	予想発生量
普通作物	イ ネ	いもち病（葉いもち） 縞葉枯病（ヒメトビウンカ） ニカメイガ（第 1 世代） イネミズゾウムシ	平 年 並 やや遅い やや遅い —	平 年 並 平 年 並 少 な い やや少ない
果 樹	ナ シ	黒斑病 黒星病 輪紋病 アブラムシ類 ニセナシサビダニ シンクイムシ類	平 年 並 平 年 並 平 年 並 平 年 並 遅 い 平 年 並	平 年 並 やや多い 平 年 並 平 年 並 やや少ない 平 年 並
	カ キ	落葉病 カキノヘタムシガ	平 年 並 平年並～やや遅い	平 年 並 平 年 並
	ブドウ	べと病 チャノキイロアザミウマ ハマキムシ類（チャノコカクモンハマキ）	やや早い 平 年 並 平 年 並	やや多い 平 年 並 やや多い
野菜・花き	スイカ、メロン	つる 枯病、炭疽病 うどんこ病 アブラムシ類 ハダニ類	平 年 並 平 年 並 平 年 並 平 年 並	平 年 並 平 年 並 平 年 並 平 年 並
	イチゴ	うどんこ病 アブラムシ類 ハダニ類	平 年 並 平 年 並 平 年 並	平 年 並 平 年 並 平 年 並
	ネ ギ	べと病 さび病 黒斑病 ネギアザミウマ ネギハモグリバエ	— 平 年 並 平 年 並 やや遅い 平 年 並	多 い 平 年 並 平 年 並 平 年 並 平 年 並
	ブロッコリー	コナガ	やや遅い	平 年 並
	シ バ	葉腐病（ラージパッチ） シバツトガ	平 年 並 平 年 並	平 年 並 平 年 並

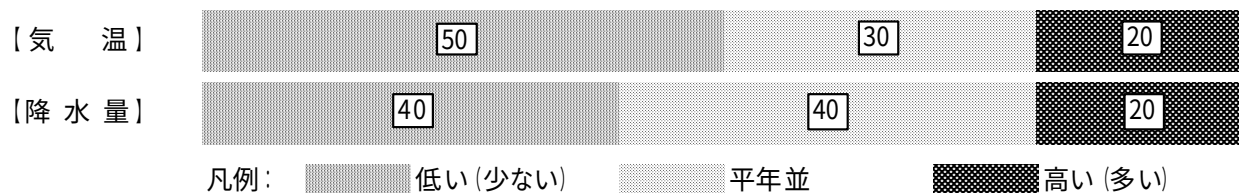
気象予報（抜粋）

1 か月予報（予報期間：5 月 2 9 日～6 月 2 8 日、5 月 2 8 日 広島地方気象台発表）
向こう 1 か月の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量の確率は以下のとおりです。

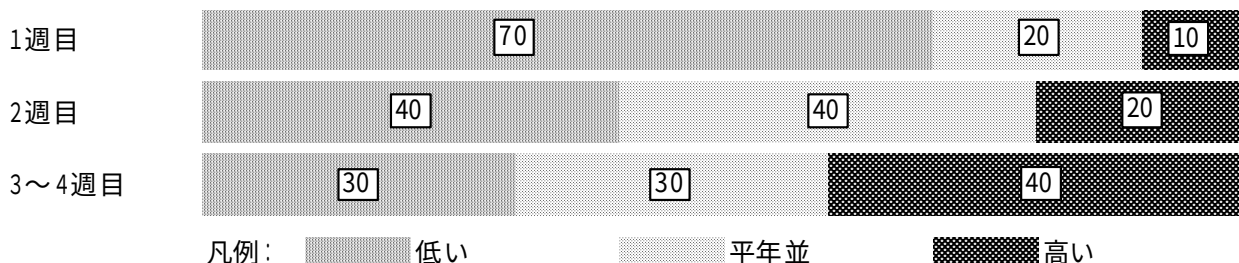
天気は数日の周期で変わるでしょう。ぐずつく時期がある見込みです。

向こう 1 か月の気温は、低い確率 5 0 % です。降水量は、平年並または少ない確率ともに 4 0 % です。週別の気温は、1 週目は低い確率 7 0 %、2 週目は平年並または低い確率ともに 4 0 % です。

＜向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%)＞



＜気温経過の各階級の確率(%)＞



普通作物

【イ ネ】

1 いもち病（葉いもち）

（1）予報の内容

発生地域 県下全域
発生時期 平 年 並
発生量 平 年 並

（2）予報の根拠

ア 昨年の穂いもちの発生は平年並であったため、種子の保菌率は平年並と予想される。

イ いもち病に弱い品種の作付割合が約9割を占めている。

ウ 5月下旬現在、苗いもちの発生は確認されていない。

エ これまでの気象経過、向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

（3）防除上注意すべき事項

ア 移植後は、ほ場をよく観察して早期発見に努め、急性病斑がみられた時は、直ちに登録のある粉剤又は水和剤で防除を行う。

イ コシヒカリ、ひとめぼれなどの本病に弱い品種、多肥、遅植えなどの条件では特に発生しやすいので、注意する。

ウ 補植用置き苗が本病の発生源となることが多いので、補植が終わったら放置せず、早めの処分を徹底する。

2 縞葉枯病（ヒメトビウンカ）

（1）予報の内容

発生地域 県下全域
発生時期 やや遅い
発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア これまでの気象経過、向こう1か月の気象予報から、本病の媒介虫であるヒメトビウンカ第2世代幼虫のふ化最盛期は、平年よりやや遅い7月第3半旬頃になると予想される。

イ 昨年の本病の発生量はやや多かった。

ウ 昨年のヒメトビウンカの発生量はやや多かった。しかし、これまでの気象経過、向こう1か月の気象予報から、本種の発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本病の常発地で、ヒメトビウンカに登録のある育苗箱施用剤を使用していない場合には、第2世代幼虫のふ化最盛期（7月第3半旬頃）に、登録のある粉剤や粒剤などを散布する。

イ ヒメトビウンカはイネの葉色が濃いほ場に発生しやすいので、窒素過多にならないようにする。

3 ニカメイガ（第1世代）

(1) 予報の内容

発生地域	県下全域
発生時期	やや遅い
発生量	少ない

(2) 予報の根拠

ア これまでの気象経過、向こう1か月の気象予報から、発蛾最盛期は平年よりやや遅い6月第5半旬頃になると予想される。

イ 5月第5半旬までの予察灯及びフェロモントラップへの総誘殺数は、平年に比べて少ない。

(3) 防除上注意すべき事項

本種に登録のある育苗箱施用剤を使用していないほ場において、若齢幼虫期（6月下旬）に要防除水準を超えた場合には、登録のある粉剤などを散布する。なお、6月下旬における本種の要防除水準は、葉鞘変色茎率5%である。

4 イネミズゾウムシ

(1) 予報の内容

発生地域	県下全域
発生量	やや少ない

(2) 予報の根拠

5月第5半旬までの予察灯への総誘殺数は、平年に比べてやや少ない。

(3) 防除上注意すべき事項

移植期の防除を行っていないほ場、又は移植期の防除を行っていても成虫の食害が多いほ場において、要防除水準を超えた場合には、登録のある粒剤や粉剤などを散布する。なお、本種の要防除水準は成虫寄生密度0.5頭/株である。

果 樹

[ナ シ]

1 黒斑病

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場（東伯郡北栄町）における5月第6半旬の孢子飛散数は、平年を下回った。

イ 5月下旬現在、一部のナシ園の幼葉や幼果などで本病の発生が認められる。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 6月になると新梢葉が多くなり、薬液の付着むらが出やすいので、新梢の先端まで薬液が十分かかるよう注意する。

イ 薬剤はチウラムフロアブル（トレノックスフロアブル又はチオノックフロアブル）500倍とポリオキシシンAL水和剤1，500倍の混用液、アントラコール顆粒水和剤500倍液、ナリアWDG2，000倍液などを使用する。

ウ 園内の風通しをよくするため、下草の管理を徹底する。

2 黒星病

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場（東伯郡北栄町）における開花期以降の果そう基部病斑からの分生子の飛散数は平年を下回った。

イ 県内の一部では多発園が認められている。

ウ 5月下旬現在、葉や幼果に発病が認められているナシ園では、今後、降雨が多くなると発病が増加することが予想される。

エ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病した葉や幼果は取り除き、園外に持ち出し処分する。

イ 赤ナシの有袋栽培では、袋掛け直前に必ず薬剤散布を行って袋掛けを行う。

ウ 薬剤はアントラコール顆粒水和剤500倍液、オキシラン水和剤600倍液、ナリアWDG2，000倍液などを使用する。また、現在、発生が認められる園では、孢子形成阻害効果の高いEBI剤（アンビルフロアブル1，500倍液、スコア顆粒水和剤4，000倍液、オンリーワンフロアブル4，000倍液など）を追加散布する。

エ EBI剤の散布にあたっては、薬剤耐性菌の発生を回避するため、EBI剤以外の薬剤との輪番散布とする。

3 輪紋病

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 伝染源となるいぼ病斑の発生の多い園が一部のナシ園で認められる。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 果実の発病は袋掛けで防げるが、袋掛けが遅れると発生が増加するので、摘果が終わり次第、早めに袋掛けを行う。

イ 果実及び枝の発病を抑えるため、梅雨期の薬剤散布を徹底する。

ウ 薬剤はオキシラン水和剤600倍液、ナリアWDG2,000倍液などを使用する。

4 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月第6半旬現在、県予察ほ場（東伯郡北栄町）におけるワタアブラムシの平均寄生新梢率は6.3%（平年：6.5%）で平年並、ユキヤナギアブラムシは同0%（平年：6.7%）で少ない発生量となっている。

イ 5月19日の巡回調査の結果、アブラムシ類の発生は平年並～やや少なかった。

ウ 向こう1か月の気象予報から、アブラムシ類の発生にやや好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発生が多いほ場では、アドマイヤーフロアブル5,000倍液又はウララDF4,000倍液などを散布する。

イ アドマイヤーは、薬剤抵抗性の発達を避けるため連用せず、年1回限りの使用とする。

5 ニセナシサビダニ

(1) 予報の内容

発生時期 遅い

発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、県予察ほ場（東伯郡北栄町）におけるニセナシサビダニの新梢先端葉1枚当たりの寄生個体数は0.2頭（平年：169.8頭）で少ない発生となっている。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生最盛期は平年より遅い6月下旬～7月上旬頃と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

第2回目の防除は、発生最盛期の6月下旬頃を目安に実施する。薬剤はハチハチフロアブル2,000倍液などを使用し、ニセナシサビダニが寄生している新梢先端部に薬液が十分付着するように散布する。

6 シンクイムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア ナシヒメシンクイの越冬世代成虫（第1回成虫）の発生盛期は、湯梨浜町で平年並の4月中旬となった。
- イ 現地8地点で調査しているフェロモントラップの誘殺数は、ナシヒメシンクイで前年並～やや少なくなっている。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、ナシヒメシンクイの第1世代成虫（第2回成虫）の発生最盛期は平年並の6月上旬～中旬頃と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 受粉樹に残っている果実など(裸果)はシンクイムシ類の発生源となるので、早急に除去する。
- イ 防除暦を参考に定期的な防除を行う。

[カ キ]

1 落葉病

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並
発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

- ア 去年の本病の発生量は平年並であったため、越冬菌密度は平年並と見込まれる。
- イ 本病は連続降雨により発病が助長される。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤は、落花始め～生理落果期に、有機銅フロアブル（キノンドーフロアブル又はドキリンフロアブル）1，000倍液、デランフロアブル2，000倍液、マンゼブ水和剤（ジマンダイセン水和剤又はペンコゼブ水和剤）600倍液などを10日間隔でそれぞれ1回ずつ散布する。

2 カキノヘタムシガ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並～やや遅い
発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

- ア 5月下旬現在、予察灯（鳥取市河原町）における誘殺は認められていない。
- イ 向こう1か月の気象予報から、成虫の発生最盛期は平年並～やや遅い6月上旬と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

落葉病の防除時期に合わせてパダンSG水溶剤1，500倍液などを散布する。なお、パダンSG水溶剤は、開花後に発生するチャノキイロアザミウマにも効果がある。

[ブドウ]

1 ベと病

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、葉に加えて果梗の発病も散見され、平年よりやや多い発生量となっている。

イ 本病の発生は平年よりやや早く認められた。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本病は連続降雨により発病が助長され、施設栽培ではハウスの谷部など雨に当たりやすい場所や多かん水園での発生が多い。

イ 果粒が大豆大以上になると薬剤散布によって果粉が溶脱するので、果粒が小豆大までにアミスター10フロアブル1, 000倍液又はストロビードライフフロアブル2, 000倍液などを新梢先端や副梢に十分量散布する。

ウ 本病の発生が多い園では、薬剤が果房に直接かからないように注意して、ランマンフロアブル2, 000倍液、ホライズンドライフフロアブル2, 500倍液を輪番で散布する。

2 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、県予察ほ場（東伯郡北栄町）の黄色粘着トラップによる本種の誘殺数は、ほぼ平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生が増加する時期は、平年並の6月上旬頃と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

例年発生の多い園では、モスピラン水溶剤4, 000倍液、バリアード顆粒水和剤4, 000倍液などを6月上旬～中旬に必ず散布する。ただし、果実に直接かかると果粉が溶脱する恐れがあるため、果房にかからないようにする。

3 ハマキムシ類（チャノコカクモンハマキ）

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、県予察ほ場（東伯郡北栄町）の性フェロモントラップによるチャノコカクモンハマキの誘殺数は、平年並～やや多い。

イ 向こう1か月の気象予報から、ほぼ平年並の6月下旬～7月上旬頃からふ化幼虫の発生が増加すると見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

防風樹のサンゴジュは本種の発生源になるので、注意する。

野菜・花き

[スイカ、メロン]

1 つる枯病、炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地調査ほ場（スイカ）における、つる枯病及び炭疽病の発生量は平年並である。

イ 本病は降雨によって発病が助長される。向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア トンネル内が過湿にならないように換気を行う。

イ 雨滴の当たる箇所や株元から発病しやすいので、雨がなるべく当たらないようにトンネルの開閉を行う。また、薬剤散布は株元にも薬液がよくかかるように丁寧に行う。

ウ 雨の日が続くと発病が増加するので、散布間隔を短くし、雨の止み間に防除する。

エ 防除薬剤は、スイカでは、ジマンダイセン水和剤600倍液、アントラコール顆粒水和剤600倍液、ダコニール1000の1000倍液などを散布する。メロンでは、ジマンダイセン水和剤600倍液などを散布する。

2 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地調査ほ場における本病の発生量は平年並である。

イ 本病は、25℃前後の気温と乾燥条件で発病が助長される。向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 既に発病のみられるほ場では、スイカ、メロンともにトリフミン水和剤5,000倍液などを散布する。

イ つる枯病も発生している場合には、スイカではポリベリン水和剤1,000倍液、メロンではポリベリン水和剤1,500倍液などを散布する。

3 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場（東伯郡北栄町）に設置した、黄色水盤における5月下旬までの有翅アブラムシ類の飛来量は平年並である。

イ 5月下旬現在、現地調査ほ場におけるアブラムシ類の発生量は平年並である。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ハウスの換気部分や出入口には寒冷紗被覆を行い、アブラムシ類の侵入防止に努める。

イ 防除薬剤は、スイカのハウス栽培で収穫間近なものは、アドマイヤー水和剤 2, 0 0 0 倍液を散布する。トンネル栽培では、肥大中期に発生がみられる場合にはアドマイヤー水和剤 2, 0 0 0 倍液、収穫前にはダントツ水溶剤 4, 0 0 0 倍液などを散布する。

ウ メロンではアドマイヤー水和剤 2, 0 0 0 倍液を散布する。

4 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、県予察ほ場（東伯郡北栄町）におけるハダニ類の発生量は平年並である。

イ 現地調査ほ場におけるハダニ類の発生量は平年並である。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

スイカ、メロンともに、発生初期にバロックフロアブル 2, 0 0 0 倍液を散布する。その後発生がみられた場合はマイトコーネフロアブル 1, 0 0 0 倍液、ダニサラバフロアブル 1, 0 0 0 倍液などを散布し、多発した場合にはコロマイト乳剤 1, 0 0 0 倍液を散布する。

[イチゴ（育苗期）]

1 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地調査ほ場の育苗床における本病の発生量は平年並である。

イ 本病は気温が 2 0 ℃前後のやや低温条件で発病が助長される。向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本ほ場に病原菌を持ち込まないために、特に6～7月の育苗期間中の防除を徹底する。

イ 防除にあたっては、葉裏へも薬剤が付着するように丁寧に散布を行う。

ウ 防除薬剤は、発病初期まではベルクト水和剤 1, 0 0 0 倍液などを散布する。既に発病している場合には、カリグリーン 8 0 0 ～ 1, 0 0 0 倍液とバイコラール水和剤 5, 0 0 0 倍液又はトリフミン水和剤 5, 0 0 0 倍液を混用散布する。

2 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場（東伯郡北栄町）に設置した、黄色水盤における5月下旬までの有翅アブラムシ類の飛来量は平年並である。

イ 5月下旬現在、現地調査ほ場の育苗床におけるアブラムシ類の発生量は平年並である。

ウ 向こう1か月の気象予報から、今後も平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

防除薬剤はベストガード水溶剤2,000倍液、サンヨール500倍液などを散布する。

3 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地調査ほ場の育苗床におけるハダニ類の発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、今後も平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ハダニ類の発生源となる畦畔雑草に対し、ハービー液剤200倍液を散布するなど除草に努める。

イ 発生初期にニッソラン水和剤2,000～3,000倍液、オサダンフロアブル2,000倍液などを散布する。発生量が多い場合は、コテツフロアブル2,000倍液、コロマイト乳剤1,000～1,500倍液（親株床での登録）などを散布する。

[ネギ]

1 ベと病

(1) 予報の内容（平成22年4月14日付、病虫害発生予察注意報第1号発表）

発生量 多い

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は、夏ネギを中心に平年と比べて多い。

イ 本病は、15℃～20℃程度の気温で降雨が続くと発病が増加するが、向こう1か月の気象予報から、発生量は引き続き多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

病虫害発生予察注意報第1号を参照。

2 さび病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地調査ほ場における本病の発生量は平年並である。

イ 本病は比較的低温で降雨が多い場合、発病が助長される。向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 6月に収穫する作型で、発病の多いほ場では、アミスター20フロアブル2,000倍液を散布する。
- イ 7月以降に収穫する作型では、6月上旬から、オンリーワンフロアブル1,000倍液、ラリー乳剤4,000倍液などを散布する。

3 黒斑病

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並
発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

- ア 5月下旬現在、現地調査ほ場における本病の発生量は平年並である。
- イ 本病は気温が25℃前後で、降雨が多い場合、発病が助長される。向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 根傷みや肥料不足になると発病しやすいので、排水対策を実施し、肥培管理に注意する。
- イ 防除薬剤は、ポリベリン水和剤1,500倍液、ロブラール水和剤1,000液などを散布する。

4 ネギアザミウマ

(1) 予報の内容

発生時期 やや遅い
発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

- ア 5月下旬現在、現地調査ほ場での本種の発生量はやや少ない。
- イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期はやや遅く、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 定植時には、ジノテフラン粒剤（アルバリン粒剤又はスタークル粒剤）6kg/10aの株元散布、アクタラ粒剤5の6～9kg/10aの作条混和、ジノテフラン水溶剤（アルバリン顆粒水溶剤又はスタークル顆粒水溶剤）50倍セルトレイ灌注などの処理をする。
- イ 土寄せ時に、ダントツ粒剤の3～6kg/10aを株元散布する。
- ウ 散布剤はアクタラ顆粒水溶剤1,000倍液、モスピラン水溶剤2,000倍液、アグロスリン乳剤2,000倍液などを散布する。

5 ネギハモグリバエ

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並
発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

- ア 5月下旬現在、県予察ほ場（東伯郡北栄町）における本種の発生量はやや少ない。
- イ 現地調査ほ場での本種の発生量は平年並である。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、今後も平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 定植時の処理についてはネギアザミウマの項参照。土寄せ時にはダントツ粒剤の3～6 kg/10 aを株元散布、ベストガード粒剤6 kg/10 a株元処理をする。

イ 散布剤は、アクタラ顆粒水溶剤1,000倍液、アグロスリン乳剤2,000倍液などを散布する。

[ブロッコリー]

1 コナガ

(1) 予報の内容

発生時期 やや遅い

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場（東伯郡北栄町）における本種の発生時期はやや遅く、発生量はやや少ない。

イ 5月下旬現在、現地ほ場における雄成虫のフェロモントラップ誘殺数及び幼虫の発生量はやや少ない。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期はやや遅く、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 6月中旬以降収穫のブロッコリーで幼虫の発生がみられる場合、スピノエース顆粒水和剤5,000倍液、ゼンターリ顆粒水溶剤1,000～2,000倍液などを散布する。

[シ バ]

1 葉腐病（ラージパッチ）

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地調査ほ場における本病の発生量は平年並である。

イ 本病は降雨によって発病が助長される。向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本病の発生前にセレンターフ顆粒水和剤0.5 g/m²を0.1～0.5 L/m²散布する。

イ 既にパッチがみられる場合は、発病部位を中心にグランサー水和剤500倍液0.5 L/m²、バリダシン液剤5の500倍液0.5～1 L/m²などをスポット散布する。

2 シバツトガ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地調査ほ場における本種のフェロモントラップ誘殺数は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

幼虫による被害がみられる場合は、ダイアジノン乳剤40の1,000倍液0.3~1 L/m²、ジェイエース水溶剤1,000倍液0.3 L/m²、スミチオン乳剤1,000倍液0.3~2 L/m²などを散布する。

[おしらせ]

農薬は、農林水産省の登録番号のあるものを、ラベルをよく読んで使いましょう。詳しい内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます。(http://www.famic.go.jp/)

**農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、
周辺への飛散には十分注意しましょう。**

<鳥取県病虫害防除所ホームページ>

アドレス <http://www.jppn.ne.jp/tottori/>

病虫害の発生予察情報やフェロモントラップ調査結果(野菜の各種害虫、果樹のシンクイムシ類など)、病虫害の診断方法などの情報をお知らせしています。御利用ください。

鳥取県病虫害防除所

〒680-1142 鳥取市橋本 260

TEL: 0857-53-1345、FAX: 0857-53-0723

E-mail: boujyot@titan.ocn.ne.jp

※次回の予報発表は、7月8日(木)の予定です。